

氏 名：岡津 愛子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 217 号

学位授与年月日：2022 年 3 月 10 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 蛭田 明子（聖路加国際大学准教授）

副査 片岡 弥恵子（聖路加国際大学教授）

副査 大田 えりか（聖路加国際大学教授）

副査 堀越 勝（国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター特命部長）

論 文 題 目：不安障害のリスクを有する妊婦に対する認知行動療法を活用した介入プログラムの開発と有効性の検討：パイロットランダム化比較試験

博士論文審査結果

本論文は不安障害のリスクのある妊婦に対し、トレーニングを受けた助産師が行う認知行動療法(以下 CBT)を活用したプログラムを開発し、パイロットランダム化比較試験によりプログラムの効果とその実施可能性を評価するものである。

対象は精神疾患等の通院歴がなく、妊娠時に全般性不安障害アセスメントツール GAD・7 で中等度の不安障害に該当する妊婦。無作為に介入群(33 名)と対照群(30 名)に割り当てられた。介入群はトレーニングを受けた助産師により 1 回 30 分の心理教育と CBT のセッションを妊娠後期に 3 回、Web で個別に提供された。最終セッションの 1 週間後および出産後 1 週毎に 3 回、計 4 回のフォローアップのメールもプログラムに含まれる。主要な結果は以下である。

・Primary Outcome:介入前から産後 1 か月の GAD・7 得点(不安)の変化量の差

介入群・1.77、対照群 .97 ($t=.322$, $p=.521$)、効果量は $d=.159$ であった。

・Secondary Outcome:介入前から産後 1 か月の精神的健康度の評価尺度 K6 変化量の差

介入群・3.55、対照群・1.62($t=1.40$, $p=.168$)、効果量は $d=.361$ であった。

・サブ解析:初産産別の GAD-7 の変化量の差

初産婦は介入群・1.67、対照群 0.43 ($t=.935$, $p=.359$)、効果量 $d=.35$ であった。

経産婦は対照群で変化量が大きかった。しかし、対照群は産前から産後に得点が上がるのに対し、介入群は上昇がみられなかった。

・プログラム評価

満足度は高く概ね肯定的な評価であったが、産後のセッションを希望する声もあった。実施者が助産師であることに肯定的な評価が、方法が Web であることによる不具合の声は少数であった。

審査では以下の 4 点が指摘された。

- ① この介入研究の位置づけを明確にする。CBT を用いた介入が助産師により実施されることの独自性、オンラインで実施されることの有用性や意義等を、文献レビューを含め検討し、追記する。
- ② ①に関連し、看護学の中に CBT をどう入れていくのかという視点での考察を含める。
- ③ 介入の時期や 3 回のセッションのインターバルの妥当性、産後のセッションの必要性を検討、追記する。
- ④ 不安障害の疑いというグレーゾーンの妊婦でも望ましい変化が出る、妊娠・出産で不安を持つのは当然だがそれが不必要に上がらないことの意義を考察に追記する。

上記について適切に修正がなされたことを審査委員全員で確認した。

本論文は CBT のトレーニングを受けた助産師が介入することで、心理専門職が介入せずとも不安障害を悪化させないことを示した点で意義が大きく、周産期のメンタルヘルスが問題になっている昨今、助産の実践に CBT を導入することで、予防的介入が可能である可能性が示されたことが高く評価された。

以上により、本論文は本学学位規定第 5 条に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有する者と認め、論文審査に合格と判定する。